

うるおいと活気の堀川へ

堀川は明治後半から名古屋の産業が盛んになったことにより、船による輸送や筏の曳航・係留の場所として最大限活用された。のちに水質の悪化もあって人々は川に背を向け、生活から切り離されてしまった。しかし、堀川は都心を流れる唯一の川であり、名古屋とともに生まれ名古屋を支えてきた川である。輸送路としての役割がなくなった堀川を再生させようと、様々な取り組みが進められている。

昭和 61 年に市制百周年記念事業の大要が発表された。メインイベントを「世界デザイン博」とし、その会場は堀川を軸とする名古屋城・白鳥・名古屋港ガーデンふ頭である。事業の一つに堀川の「昭和の大改修」があげられ、「堀川に新しい息吹を」をキャッチフレーズに「潤いと活気の都市軸」として総合的整備を進めることとした。併せて木曾川からの導水も促進し、博覧会場となる白鳥地区の整備が堀川総合整備の第一歩になるとしている。

本格的な堀川の再整備に向けて、平成元年に「堀川総合整備構想」が公表された。「うるおいと活気の都市軸・堀川」を再びよみがえらせることを目標として、平成 4 年から本格的に整備が始まった。

堀川全川の改修には長い年月が必要なため、黒川・納屋橋・白鳥の 3 地区を先行して行い、7 年に「白鳥プロムナード」が完成したのをかわきりに、「千年プロムナード」「北清水親水ひろば」、納屋橋地区でも岸辺の遊歩道や植栽が整備され、その後、松重・名城地区の整備も始まった。

水質悪化の一因となっているヘドロの除去も始められ、23 年度までに 14 万 m³余を除去している。

また、これまで堀川の管理は愛知県が行ってきたが、19 年から名古屋市の管理に変わっている。

平成 17 年には、納屋橋北東に建つ旧加藤商会ビルが修復され、地上部はタイ料理の店、地下には「堀川ギャラリー」が開設され、納屋橋と相まってレトロな雰囲気を醸し出している。

堀川舟運のシンボルとも言える松重閘門は、20～23 年度に耐震補強や外壁の補修などを行い、今後も長期にわたってその偉容を保存できるようになった。

船が通らなくなって久しい堀川だが、船着場が宮の渡し・名古屋国際会議場・納屋橋・朝日橋に造られた。屋形船がイベントの時や貸し切り船として運航されるようになり、水上から名古屋の街を見るという珍しい体験が好評を博している。

平成 24 年には「堀川まちづくり構想」がつくられた。

- ・堀川の効果的な利用・活用
- ・町づくりと一体となった取り組み
- ・関係者の連携による推進体制の構築

の視点から、「堀川」「ひと」「まち」のつながりを深め、「うるおいと活気の都市軸・堀川」の再生をはかるものである。

かつて堀川は、その能力の極限まで活用され、名古屋の町と堀川はお互いに影響し合って姿を変えていった。新たな時代に向けて、堀川と町、そしてそこに暮らし働く人々がどんな関係を創ってゆくのか楽しみである。



北清水親水広場



納屋橋のリバーウォーク



旧加藤商会ビル



堀川をゆく遊覧船